

【事例報告】「北九州の音楽文化を支える会」アコルデの活動について

アコルデ代表

清原 雅彦氏

みなさんお早うございます。今紹介していただいたアコルデの会の代表をしております清原と申します。私がやっているボランティアの心得について若干お話をさせていただきたいと思います。今の久保先生のように、難しいことを上手に柔らかくお話することはできませんので、ちょっと堅苦しいかもしれませんがお許してください。私がお話するのは、私の個人的な見解を申し上げますので、「役に立つな」と思う箇所だけを聞いていただいて参考にしていただければな、と思います。

今、マズローの5段階欲求説のお話がありましたが、一番上の話「自己実現」で、私の資料の一番に書いている「ボランティアを愉しむ」まさにその通りだと思います。

ボランティア活動は、やっぱり「愉しんで仲間として付き合う」という心構えがないといけない、と思っています。活動の中で悩んで落ち込んだりする人もいるようですが、ボランティアという自発的な行動は、金銭的な、実質的な報酬等の満足は得られないわけですから、それで愉しまないと意味がないというのが私の考えであります。

そこで「何でボランティア活動をするのか」を考えなければいけないわけですが、それは「ボランティア活動そのものによって、同時に愉しみをを感じる」ということではないかな、と思います。

皆さんも経験があると思いますが、障害のある人たちは、“してあげる”ということと言われるのが一番嫌がられます。障害者の人たちは「してもらいたくない」、自分で自立して行動したいのに上から目線で“してあげる”と言われるのが一番嫌なのです。

それと同じように、ボランティア活動の中にも、その“してあげる”という気持ちがあったら、これはいけないと思っています。どういうことなのかももう少し紹介しますと、「ボランティアをすることによって合理的な関係、例えば投げたボールが帰ってくることを求める関係じゃなく、ボールを投げることで自体に愉しみをみる」ということが非常に大事なことでないかと思っています。

他の例では、東京に後楽園球場というのがあります。後で楽しむという意味だと思いますが、自分が楽しむだけでなく、まず人を楽しませて、その次に自分が楽しむという意味で後楽園と名前が付いたと聞いております。このように、始めから「与える」という感じではなくて、活動することによって同時に対象の「相手から喜びを与えられる」ことを実感することが非常に大事なのだ、と思います。

それから次に「信念を持つこと」と書いております。

ボランティア活動を「ちょっと良さそうだから」とか、「ちょっとしてやったら、喜ぶからしてやろう」、みたいな簡単な気持ちで始めたとすれば、相手にもよくないし自分にもよくないと思います。やるからには徹底的にやりとげよう、という固い信念をもってボランティア活動は始めるべきだと思います。すぐ投げ出すということがあってはならない。そのために、自分が出来ることはどういうことなのかということを、自分なりにきちっと整理して始めるということが大事ではないかと思っています。

私が関係しているのは、音楽家を支援する活動です。

音楽家というのは自分の音楽をしたい、多くの皆さんに聞いて貰いたいものです。そのためには会場を予約したり、ポスターを作ったり、印刷物を作ったり、チケット売って回ったり、演奏するまでの準備がなかなか大変なのです。それで、結局、音楽活動ができない。

特にあの人たちは事務に不得手で、苦手になっているようです。そこで、そういう人が「何で音楽をやりたいのか」と、いうことを理解したうえで手を貸してあげよう、ということとは非常に大事だと思います。

それと私は「音楽そのものがボランティア」だと思っています。

私が理解しているのは、皆さんは違う考え方だと言われるかも知れませんが、「音楽というものは基本的にはボランティア」だと思っています。一緒に同時代生きているもの同士、共感をもって、そしてかつ少しでも高みに行こう、あるいは豊かに暮らしていこうという意識のもとに、ステージでの音楽活動に臨んでいると思います。

例えばバッハ・ベートーベン、この人たちが生涯をかけて作曲をしたその曲が、今も世界中で好んで演奏され多くの聞く人の心を癒し生活に潤いを与えてくれている。これは、やっぱり「音楽そのものがボランティア」と、いうことになるのではないのでしょうか。

今、テレビに出る若い世代の音楽家はそういう気持ちが少し足りないのではないかと、何百年にわたって残そうという気持ちを持って音楽にかかわっているだろうか？と思います。音楽家は今も昔も、非常に貧乏だったと思います。その中で、やはり後世に残したいとして作曲活動をつづけた。例えばモーツァルトの前に生まれた人は、モーツァルトの音楽を知らなかった。私は、モーツァルトの後に生まれてきて良かったな、ということになります。モーツァルトもそういうことになると思って、ひたすら作曲に励んだと思います。

このように考えますと、音楽家はその曲を演奏することについて、やはり作曲家の想いを背中に背負って、それを今に再現して伝えているのだと思います。これはまさにボランティアの世界です。例えば演奏会のチケットをもぎってお客さまに渡すボランティアの人たちも、「共に作曲家の想いを伝えている、そういう演奏活動を一緒に実現して行こうとしている」のではないかなと思っています。「ただチケットもぎりさえしておけばいいのだ」ということではなく、実際に「ステージに立って演奏している人が何をやっているのだ」ということをやはり理解したうえで、演奏するこの人たちと同感、あるいは同じ気持ちで参加するということが大事ではないかと思っています。

よくある例ですが、「面白そうだからボランティアの活動をやってみようか？」でやってみても、これは無責任な活動でしかありません。活動の意義を十分考えたうえで信念をもって参加したいというふうに思います。

それから3番目ですが、ボランティア活動は経済的にも見返りがない活動ですから、自分の立ち位置、自分の社会的な地位がしっかりしていることが一番大事なことで、残った力でボランティアをする、ということではいけないと思います。

私は実は、弁護士をやっております。弁護士をやる中で一番気を付けているのは、「あの人は音楽のボランティアばかりやっているから、仕事に身が入らない」と言われることのないように心掛けております。要するに、二兎を追っているわけです。しかも実は、二兎ともうまく運ぶことです。「ボランティアをやれば、弁護士もいい加減になっていたかも知れんな」と、思うことがあります。「あの人はボランティアをやっていると自慢しているが、仕事は手抜きばかりしている」と言われたらいけないという思いで、一生懸命弁護士のほうもやっております。その結果、両方うまくいっている、という結果になっております。これは皆さんも思い当たる節があると思います。自分たちの職業（しごと）をきちっとやった上で、ボランティアもきちっとやる。それは絶対自分のためになってくる、と私は信じております。

そういうことを申し上げた最後に、やっぱり「ボランティアは愉しくやらなければならない」と申し上げます。

何が愉しいかというと、おいしいもの食べたり、酒を飲んだり、踊ったりするのが愉しいというレベルじゃなくて、文化ボランティアとして文化と常日頃接することで、やっぱり自分を高めていると感じます。そういうものがあるから愉しいのです。私たちの音楽ボランティアによって、演奏する対象の人たちもちろん喜ぶでしょうが、何よりも自分自身が高められている、そしてその喜びを味わっているという自己実現。人生の目的がどこにあるのかと考えたとき、それは自分の持っている能力を最大限発揮して人生を送るのが一番幸せじゃないか、と信じております。そのためにボランティア活動は非常に重要な活動である、とっております。

以上、私の考えていることを申し上げましたが、全て正しいということではありません。何か参考になれば、とってお話いたしました。ありがとうございました。